

—活動概略—

吉野 福男

過去十数年間、日本において単発的な河川航行および激流下りを主として来た我々は、日本において最激流と云われている黒部川を1970年に成功、又、1973年にはアメリカ合衆国コロラド河450Kmを航行するなど激流航行に関して世界的レベルまで向上した。

しかしながら、今後河川探検を続けるにあたって、世界の最激流を航行すると共に河川・ボートに関するフィールドを幅広く捕えた活動をやっていかなければならないだろう。

今回の日本横断航行は、この思考を実践に移す第一歩である。

今回の合宿にあたって我々は、まず富士川から信濃川の地図を見ながら、過去の経験および資料を参考にルート・方法・手段を厳密に検討し、それに必要な装備・食糧などを再検討した。一番問題になった点は、富士川をファルトボートによって遡る事であった。ファルトボートに関しては、あまり経験がなく川を遡る事も始めての事であった。つぎに、甲武信岳越えである。これも沢に対する経験者も少なく、1人当り35～40kgでかさのあるファルトボートなどを背負っての沢登りであった。

上記の事に関して我々は、一年生に対する河川航行指導および、ファルトボート技術修得、川を遡るデータ収集、あるいは、6月中旬に富士川・信濃川・甲武信岳偵察を行ない、装備・食糧に関しては軽量化し、コンパクト化など色々な問題を解決し、7月21日やっと出発地点富士川河口に全員集結した。

7月上旬からの梅雨により富士川の状態は最悪であり、はたしてボートで遡る事ができるかどうか、はやくも不安が全員の頭をかすめた。富士川河口を出発してからと云うもの、我々は、手強い富士川を相手に2台のファルトボートを漕いで、引っぱって、かついでと、ただ上流に向って一歩でも進む事のみ考え悪戦苦闘の毎が続いた。

7月30日、9日間の日数を費やして富士川の上流山梨市に到着し、ファルトボートを上げた時はほんとひと安心したものである。それとともに甲武信岳・信濃川の事が一段と不安になってきた。

7月31日から8月4日までが甲武信岳越えに費やされた。偵察により一応の事は把握していたが、実際に35kgの荷物を背負っての沢登りは多くの危険性をはらんでいたため、十分余裕を持って一歩一歩慎重に登って行ったが肉体的・精神的にかなりハードな甲武信岳越えであった。

8月5日、信濃川源流居倉よりゴムボートによる河下りであるが、富士川とは反対に、まったく水量がなく、8月9日まではゴムボートに乗って下る事よりゴムボートを引っぱったり、押したりして川の中を歩いていた。この頃から全員、今まで蓄積された疲れが出始めた。

信濃川に入ったら河下りを楽しめると思っていた考えがあまりにもあまかった。

発電用のダムのために水が取られ快適な河下りをした距離は100Km前後であった。

このような困難に出合いながら、どうにか8月19日、信濃川河口日本海に出る事ができた。一切の交通機関を使用せず、ボート・徒歩のみで全行程492Kmにも及ぶ日本横断を31日間もの日数を費やして行なった成果は、今後の活動の基礎となって、大きく発展するであろう。

この計画を行なうにあたってご協力およびお世話になった方々に、私達メンバー全員、心から感謝するしだいです。